

け野原の故郷松山へ。心神耗弱状態で、帰郷の感慨はいたって薄い。

半世紀も経つと労苦も苦汁も懐かしさのペールに包まれるが、そうでなくとも、抑留中に接し見聞した軍人、一般人ともに、素朴な親しみやすい人達だった。

我が軍隊の狂信、加虐性と比較すれば、この目で見たソ連軍はむしろ民主的でした。この点は大方の抑留者も認めると思う。彼等が俘虜を「こき使う時どなった」とされる歴史的代表格の言葉「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ！」は、監視兵としては、その義務を全うするための当然の掛け声であろう。逆に日本兵ならどう言動したか、想像に難くないと思う。ソ連軍人や監督が我々に暴力を振るったことも、軽蔑したこともない。独裁者を除いて一般国民は、俘虜に公平、親切であった。私なりに一言で抑留を総括すれば、「(当時の)ソ連社会機構への疑問」「得がたい極限体験」「人間愛の発見」「人間万事塞翁が馬」ということになろうか。なお、日付、数字は私の記憶と独断である。誤りあれば読者のご教示を乞う。

敗戦の苦しみ

熊本県 小佐井 善次

敗戦の引き金となった昭和二十年八月九日、一方的に不可侵条約を破りソ満国境を突破しソ連軍の猛攻撃が展開された。全満州の制空権を握り機甲軍団が怒濤の如く進撃、満州における重要基地は殆ど玉砕したの情報あり。当時私は外務省関東局に在勤中の出来事で、事實は事実として後世のために伝える事が抑留体験者の使命であると思うので、当時を思い出し、多くの証言者の方々を思い出し語ろうと思う。

八月十五日日本は無条件降伏、陛下の玉音放送である。国民は耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍べとのお言葉であった。それから光陰矢の如く五十数年の歳月が流れ、平和日本として世界最大の経済大国となり、敗戦時の満州における悲劇の有様、またシベリアへの強制抑留、飢餓と酷寒と苛酷な重労働で多くの日

本人が異国の果てに死んで行った事等、国もマスコミも世間より風化されんとしている今日、戦争を知らない世代の人々に戦争の罪悪と悲惨さを知らしめる事は体験者の務めであり、また使命であると信じて、記憶をたどりながら今は亡き証言者の思いと共に語ろう。

日本人同胞が罪もなく暴行され強姦され虐殺され、そうして遠くシベリアの異国の地で強制的に重労働を課せられた。この屈辱の歴史は決して忘却してはならない。ソ連が宣戦布告して僅か一週間にしてソ連軍の得たものは、七十万人とも八十万人にも及ぶ強制抑留者の労働力と満州全土の軍需物資、機械、工具、食糧、被服、馬そりに至るまで、拉致したその金額は計り知れない。まさに「スターリンの火事場泥棒」と言つて過言ではない。丸腰の婦女子、老人、子供に至るまで、掠奪、暴行、強姦、その惨状は例えようのない有様であった。

長官の命令でソ軍憲兵隊と共に周辺の治安維持に当たっていたので、大連駅に降りて来る日本人の避難民の見るも哀れな姿には、開いた口が塞がらない状態であつた。

あつた。着の身着のままで一寸の余地もなく無蓋貨車に詰めめで、ある婦人は赤ん坊を背中に背負い何日間も飲まず食わずの立ち往生で、死んだ赤ん坊をどうすることも出来ず、降りて来る駅前広場には数知れない犠牲者が続出した。武装解除した丸腰の日本人には何も出来ない。権力もなく、無政府無秩序状態であつた。

ある日本の憲兵隊本部で白系露人のボーイを使つていた。このボーイが非常に忠実で真面目で、日本人以上に働くので憲兵隊本部では安心して大事な仕事もやらせていたとの事で、不審な点は何一つとてなかつた。隊員より可愛がられていたそうであるが、終戦後ソ軍が進駐して来てソ軍憲兵隊より、今まで自分達の留置場であつた留置場に逆に留置されて、ソ連憲兵隊の取調官が白系露人のボーイこそ本物のソ連軍憲兵隊中尉であつたとの報に接した時、帝国軍人何たる事かと愕然としたのであつた。

ソ連軍の進駐と共に、今まで平穏であつた市内は掠奪、暴行で荒れ狂つた。射殺事件も起き、避難民、住民より毎日昼も夜も被害届けが殺到した。丸腰の自分

達には、行動を共にしても道案内くらいでどうにもならない。意見すればその場で殺されるので、現場に行くだけであった。

一番目立つのは掠奪、殺害、暴行であり、特に強姦であった。重病患者の家族が病院に入院して危篤の状態だったので、老婦人が荷物を持って看病に行く途中、病院の前で四、五人のソ連軍に捕まり、その場で裸にさせられ、一人の老婦人を汚れたソ連兵が交代で強姦した。無力の日本人は何も出来ない。婦人は殺されず病院に逃げ込んだが、残念のみではすまされない日本人の気持ちである。

市内の広い公園でソ連軍の女子戦車隊が約三十人ぐらい天幕で野営していた。そこを日本人の男が通ると必ず呼び止め、声をかけて天幕の中に引き込む。何をするかと心配すればロシア語でフルフルと言うのである。セックスのことで、女が男を強姦することであって、返事しないと殺されるので仕方なく言いなりになった日本人もいたらしく、そこは通らないようになった。夜になると日本人の女性はほとんど天井裏暮らしで、

枕を高くして寝る事はなかった。というのは、ソ連兵が放浪者みたいな服装でまさに飢えた野獣のように戸を片っ端から叩き、「マダム出せ、娘出せ」と每晚徘徊したからであった。彼等の女に対する執拗さは全く野獣そのものであった。

日本人の上流家庭の奥さんは、每晚汚れたソ連兵が出せと徘徊し、しかも何時まで続くか判らないので耐えきれず、どうせ死ぬならソ連兵から殺されるより日本人の方と共に死にたいと届け出があったが、丸腰の日本人にはどうにもならず辛抱して貰う事になった。徘徊中、女と見たら追い回し車中に引き込んで連れ去り、何処へ連れて行くのか何日も帰さない。一週間か十日位して、身も心もボロボロになって生ける屍同然で帰る人もいた。それでも生きて帰れるだけ運が良かったのだ。連日例外なく日本人家屋に小銃を持って飛び込んで来る。どうすることも出来ず、手向かえば直ちに射殺であった。

ここで開拓団、避難民の出来事で難民の証言を語る。

八月、ある一行は東安省まで逃げ延びて来た。一人の母親は片手に幼児を抱え他の手に少年の手を引き、背中には飢えを凌ぐ僅かばかりの食糧を背負った痛ましい姿で、行く先も決まらずただ安全な地を求めて南へ急ぐ悲惨な旅であった。その時戦車三十台と共に一個中隊の歩兵がこの避難民を襲った。一斉に機銃を浴びせた。避難民は相次いで斃れた。全員死んだ。誠に悲しく、落ちのびて行く運命としてはあまりにもかなしい。

背中に子供を背負っていた日本人女性が、ソ連兵から変な事をされそうになって非常に怒って拒否したら、いきなりそこにいた三、四人のソ連兵が背中の赤ん坊をゴボウ抜きにしてホームに叩きつけて殺した。この女性は半狂乱になりソ連兵にかかっていったら自動小銃でバラバラと殺されてしまったとの事である。何とも言いようもない悲惨な光景が至る所、逃げ回る日本人に対して強奪、暴行、虐殺、冷酷無情の限りをしたのである。

特に「開拓団」「満州移民」「王道築土建設」という

国策に沿って皇国の拓土・戦士として祖国を後に満州大陸に送り出された人々は、酷寒酷暑に耐え望郷の念に涙しながら我が身に鞭打って、永住の地と定め入植した理想郷の建設も、一瞬にして悲劇のどん底に叩き落とされ、聖業と信じた開拓も水の泡と消え去ったのであった。

多くの拓友が召集され、老人、婦人、子供に至るまでソ連軍に追い回され、一物も残さず掠奪、暴行、強姦され、拓友と共に無念の涙を流しながら銃殺され、また自決して死んでいった事実は何と云ってよいか言葉が出ない。ソ連軍の暴虐は決して生きる限り忘れることは出来ない。

ソ連軍が進駐して約一カ月位して、長官の命令で本部は全員軽装で集合した。九月中旬頃と記憶している。一週間分の食糧と着替え三枚程持って、長官の訓示で、ソ連軍の要請で今より道路作業に協力するとのこと、そのまま大連駅より有蓋貨車に分乗し、ソ連兵の厳重な監視の下、北へ北へと貨車は進行し、元日本軍の兵舎跡に着き、ここで民間人、軍人と編成され出発した。

用便以外は一切外へ出さず、上官の命令は絶対的であった。一同もやっと拉致されだまされていることが判り、進行中の貨車より一人二人と組織的に飛び降りたが、殆どの同僚が監視兵より機銃で射殺されたようであった。途中、大興安嶺の山中で何人かが飛び降り逃げたが捕まり、ハルビン駅のホームで見せしめのためと言って目隠しされ皆の眼前で銃殺された。ただ無念の外はない。

貨車は国境を通過しソ連領に入り、北へ北へと広い雪の原野を通り西か東か全く想像出来ない。何日間進行したか判らないうちに、見渡す限り雪の原野に貨車は止まった。見れば雪の中に半地下の棟があり、全員監視兵に連れて行かれた。寝る部屋とてなく、自分達で大工仕事で寝る部屋を作り、残りの米があったので飯盒で飯を炊き食べたのが十一月三日であり、この日を抑留記念日として、今も変わらずただ一人で平和を願ひ、多くの犠牲者の冥福を祈っている。

この収容所に拘禁され飢餓と酷寒と苛酷な重労働でノルマに追い回されるとは、唯一人として想像しなかつ

たことであった。

一カ月もすればいよいよ作業班が決まり、私は坑内作業と決まり、黒パン一日分三百グラムで八時間ないし十時間の重労働が始まった。零下五十度、六十度のシベリアでの作業。特に炭坑で削岩手の所でのエンピ組の積み込み、運搬、坑木の組み立て、三交代制四人一組で作業、ノルマを達成する事になった。

生まれてから今まで見たこともない坑内作業で不安である。坑内は常時粉塵や発破のガス、灯油ランプの黒煙が充満し、鎮静する暇がない。一番先の切羽の所まで坑道は真っ暗で、小さいランプの灯を頼りにお互いに大きな声でオーイオーイと呼びながら歩いて行った。

坑外に引き揚げるワイヤにトロッコを連結して、空のトロッコを引き込み、積み込み、押し出す事の繰り返しで、崩れた鉱石を全部坑外に搬出しないと九時間でも十時間でも監督は帰さなかつた。全く人間としての労働力の限界を超えた苛酷な重労働で、今思ひ出すと身震いする程の死闘の作業場であつた。

ある日、毎日の重労働で疲労困憊し、半病人状態となり、ソ連軍医の命令で一切の仕事は離れて收容所内で休養中、作業人員が足りないので坑内作業に出よとの命令で坑内作業に従事した。この時、坑内に入る前にソ連監視兵が日本人通訳に「今日は零下六十度ある」と言っていた事を今も覚えていて。この作業場は坑内でも最も寒い極寒、骨身を刺す極限の想像を絶する作業場で、作業中呼吸困難となり咯血しながらその場に倒れた。身体全身痛み出し何回も咯血したが、どうする事も出来ず交代が来るまで我慢した。交代員が来て連れ出してくれ、医務室の診断の結果、急性気管支肺炎と診断された。引揚げ後三十数年経た今日、鹿児島大学名誉教授縄田十郎博士の診断で、シベリア珪肺塵肺で、この日が発病年月日である事を説明された。今も尚一人前には何事も出来ず、後遺症で苦しみ続けて世を憚りながら暮らしている。

さて、日本人抑留者はソ連の奥深く連れ去られ、戦後ソ連の国内復興のため重労働を課せられ、身も心も人間ではなく生ける虫けら同然の姿で祖国日本国の戦

費賠償の肩替りとなった事実は、抑留者一同承知の所である。戦後五十数年経た今日、当時の日本は沖繩も米軍の手に落ち、打つ手がなく、和平の斡旋をソ連に依頼する外はなく、目の前が真っ暗となって近衛文麿を特使としてソ連に派遣する事を決めていた事実、その内容は六項目で、抑留者に関係ある項目としては第四項目の賠償として一部の労力を提供するとあり、無条件降伏だけは避けたいとの当時の日本としての事実を週刊サンケイ誌が報じた。また、昭和二十年八月十九日ソ連領ジャリコーヴォで、ソ連第一極東方面司令官メレツコフ元帥が当時の感想を発表している。それによると、ハーグで結ばれた陸戦法規慣例に関する国際条約の二十条に「捕虜ヲ本国ニ帰還セシムベシ」とあり、捕虜送還に関する規定について話し合わねばならなかったが、日本軍代表関東軍首脳は、全くしなかったと言っており、これから日本人のソ連国内輸送が計画通り開始されたとしている。

ソ連の奥深く日本人抑留者は送り込まれて重労働に従事したのである。炭坑作業中の落盤での死亡者、材

木工場での事故死、伐採中の材木の下敷きで死亡した者。ほとんどが栄養失調で、朝起きたら隣の同僚が冷たくなっていても何とも思わぬようになった。鼻水たらしめて物覚えが悪くなり、次は自分の命が危ない状態でも気にはならない。虫けら同然で毎日食う事ばかり、馬糞がジャガイモに見えたり、草と言う草はほとんど食った。虫けら、ネズミも食った。ただ人間だけは食った事はない。多くの日本人同僚が異国の地シベリアで命を奪われた。日本人として懸命に頑張って意地を見た。作業から帰れば必ず毎日、夜は一時間ないし二時間は、ソビエト人民の歩いて来た道として民主教育、共産主義教育を厳しく徹底的に、ソ連政治部員の命令で日本人共産黨員、袴田黨員が指導した。若い日本人をソ連政治学校と称して三カ月間位別の収容所に連れて行き、共産教育を徹底し、階級闘争を奨励し、共産主義思想の普及を厳しくした。

そして月に一回は必ず民主学校の正課として学科試験を実施した。食堂に収容所全員の名前を一番から最後まで順位を張り出した、成績が悪いと悪条件の作業

場に回された。抑留生活一年二年と共産主義教育が厳しくなり、作業場の往復時にも収容所出発時には必ず広場に集まり何人かの組代表が高い台上にて五分間位の演説をするが、その時は必ず天皇制並びに吉田内閣を打倒しない限り労働者、農民の幸せはないと声張り上げて力説する。次に、復員の時、日本に敵前上陸した暁には必ず日本共産党に入党し、ソ同盟の力になる事を約束すると力説すると、その場は全員で拍手喝采大成功で終わるのである。

このようにシベリアの広野に極限の飢えと寒さと過酷な労働を課せられた事実は、決して忘れる事は出来ない。武装解除されて何十万の日本兵、民間人、婦女子に至るまでソ連国内の奥深く連れ去られ、収容所に拘禁されたのである。丸腰の日本人に対して威嚇発砲、掠奪の限りを尽くしたソ連兵は人道的に絶対に許せない。ウラジオストック経由で日本に送還すると言ってシベリアに送り込まれ、囚人同様に苛酷なノルマを課せられ強制労働に服した。極限の生活を生き抜いて祖国の土を踏む事の出来た人は誠に幸運であったと言わ

ざるを得ない。思えば、シベリアの奥地で重労働に
えぎながら、いつかは生還できると厳しさを耐え忍ん
だ身震いするような収容所の光景は、今も走馬燈のよ
うに脳裏を駆けめぐる。天皇陛下の玉音放送で全国民
に呼びかけられた「耐えがたきを耐え忍びがたきを忍
び」とのお言葉とは想像に絶する違いがあり、ソ連軍
の満州における開拓団虐殺事件、従軍看護婦の蹂躪事
件、ソ連軍の暴虐の爪あと、シベリア抑留者の生死の
重労働は一体何であったのか。

第二次大戦中シベリア抑留という事実は小さな歴史
かも知れないが、ただ遠い苦しい思い出として語るだ
けではすまされない。この事を忘却させてはならない。
強制労働により五体は蝕まれ、その傷痕は体の奥深く
刻み込まれ、今なお病状が進行して暮らしている生き
証人がいる事も忘れてほしくない。

今までの出来事で日本の侵略の事は、国会議員の先
生方も新聞等や外国訪問の際首脳会談で発言され、遺
憾の意を表しておられるが、抑留についての惨虐の実
態は一行たりとも記述がない。シベリアでの実態を、

後世の国民にその真実を正しく伝えることこそ平和へ
の願いであると信じて、毎年事ある度に大勢の人前で
シベリア抑留者の生き証人として訴え、事実を語って
きた。特に老人の皆様方は涙して聞かれた。抑留者は
あと幾許もないが、「人道的に全く許せない、言語道
断であり、再びあってはならない」と、私は死ぬまで
語ります、叫び続けます。食糧ももらえず重労働で亡
くなった人。栄養失調で南京虫に攻められ、骨と皮ば
かりで死んだ友。やせ細って斃れた同僚。今語るにも
表現出来ない、語るに言葉がない、だが語り続けたい。
多くの人のために、後世の日本国民のために、生ある
限り語りたい。それが生き証人としての使命だからで
ある。

抑留記

熊本県 山形 満 治

昭和十八年一月十八日、満州牡丹江穆稜^{ムヘン}県下城子、